

昭和十二年七月一日第三種郵便物認可
（每月一回一日発行）
昭和七年九月一日発行第七卷第九號

創刊大正十三年・通卷三百四号

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.304



麻生路郎☆主筆

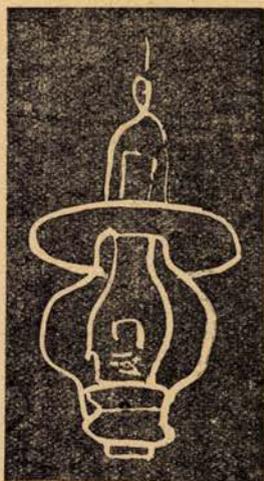
川

柳

雅

誌

九月號



不朽洞句帖

麻生路郎

色事に疲れ 糸切草を見る

未だ^{いま}慾あり水晶の教珠

淀通信病院薬局長に

榮転した没食子君に

又飲みにゆくよと君を送るなり

機関車が一つ走しつて暑いこと

P T A に出るを社交と思う母

てんでんオブラートなど子のかましやくれ

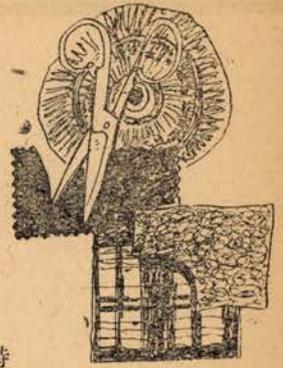
暑いことかな アナウンサの声までが

スキツチをひねり野球を遠ざける

國際で ヘイヘイヘイとへこまされ

食うや食わずで 月を観る顔になり

金持だ 胃痛だ いつの間にか死に



川柳大學 (III)

川柳と詩

福田山雨楼

詩の概念

古來詩とは志をのべる言葉だとか、詩とは調べだとか云われて来たが、要するに詩は散文と対蹠的な文学であつて、リズムミカルな言葉で感動を表現するものである。そしてそのよつて來るところのものは詩精神の發露である。では詩精神とはどんなものかと云えば、高村光太郎は「詩精神とは事物の中心に直入する精神である。事物の關係を極限の單位に追いつめて、その実相を爬羅剔抉し、更に翻つて新を生む精神である」とのべているが、平たく云えば人間の心の奥の眞実の聲である。いわゆるまことの心であり眞剣な心のあらわれである。故秋原朔太郎などは「詩は散文精神に追従すべきものでなくて、詩は文学の中心であり詩を以て散文精神を克服すべきだ」と叫んだほどで、

詩が尊い文学創作であることは間違いない。同時に詩精神を養ふことによつて、人間生活から滲み出してくるあわれ深い味わい、眞実に眞剣に生きることへの熱望、ヒューマニズムへの本能的な渴望、といった生彩のあるしかもゆとりのある心境が開けてくるのである。

詩の内容については、叙情詩の盛んな時代は美しい感動、情緒を盛つたものが多かったが現代は自由詩が盛んで、むしろ考える詩、意味や思想を傳える詩、批判の上に立つた詩が多くなつてゐる。しかし詩において思想は背後に隠すべきものであつて、思想や主張をリズムに組立てるのは卑しき詩づくりの細工である。フランスの或る詩人はこんなことを云つてゐる。「思想は詩句中にあつて果実の榮養価のように隠されていなければならぬ。一つの果実は榮養物

であるがそのくせ単に美味だとしか見えぬ。人は快樂のみをそこに感ずるのであるがそのくせ人が受けるものは滋養分である。快感美がこの目に見えぬ榮養物を被い包んでこれを指導しているのである」と、味うべき言葉である。詩の形式は実に多種多様である。西洋には数萬行に及ぶ叙事詩があり、わが國には僅か十七音字の俳句、川柳がある。三十一文字の短歌、五言絶句、七言絶句の漢詩、七五調連続の新体詩、それから定型の語数音律を揚棄した現代自由詩等々枚挙に追かないほどである。音律を持たない自由詩は韻をふんだ言葉と云ふ詩の概念から外れてゐるようにも見えるが、優れた自由詩はやはり洗練された韻律の美德は保ち、リズムの言葉となつてゐるのである。

なお詩の二大潮流として叙事詩と叙情詩とがあげられ

るが、各その特長を列記して見ると先ず叙事詩は、意味に重点があり散文詩が多く、知性的、客観的、現実的、批判的、即物的、目論的、思想的、高踏的である。次に叙情詩は感動に重点があり韻律詩が多く、主情的、主観的、空想的、感傷的、即興的、朗誦的、永嘆的、通俗的である。

川柳は特殊の詩

近年川柳の詩論、非詩論が盛んであるが、川柳は勿論詩のジャンルにあるべき文学である。古川柳や現代川柳の中に非詩の句が多いことは、それから帰納して川柳は非詩たるべしと結論することは誤りであつて、どこまでも詩精神の發露によることが川柳の根本である。ただ川柳はおかしの詩情を専らとする特殊の短詩であることを牢記しなければならぬ。川柳は如何なる感懐も句になると云うのではなく、そこにある限界のあることを知らねばならぬ。俳句に俳味と稱する制約された詩精神がある如く、川柳には川柳味と稱する特別の詩趣を必要とするのである。假令川柳家が作つても川柳味の稀薄な作品は眞の川柳ではないのである。

然らば川柳味とは何かと、云う問題になるのであるが、こゝで詳論することは預りとして、極く大づかみに説明するならば、川柳味とは俳諧から発句が独立したあとの残りの詩趣を継承したものである。一時俳諧の正系を継ぐものは川柳である。と盛んに云われたがこの見解は正しかつた。発句は蕉風によつて寂びの風流が確立され、川柳はおかしみ(笑いはその一部である)の詩趣を一手に引受け、これがわが國民の詩的嗜好に合致して現代の川柳が確立したのである。

ところが大正の末期革新川柳を提唱する一派が現われ、盛んに傳統川柳の虚を衝いて詩性川柳の昂揚を叫んだのであるが、その主張する、主知的、生命的、哲學的乃至思想的暴露の川柳の句境が、余りに川柳本來の傳統から離れ理論倒れとなつて、自ら興味と愛着を失ひ遂に自壞するの止むなきに至つたのである。この事実が示すとおり川柳に詩性を盛ろうとする意欲は、往々にして川柳本來の詩趣から逸脱して純粹詩としての方向に嚮う危険を孕み易いのである。

近年文学における批判精神の昂揚が叫ばれ諷刺詩として川柳の役割が重視されるようになったが、諷刺は川柳本来のねらいであつてその寸鉄殺人的手法とよくマッチするものである。劍花坊は晩年、新興三十二年の綜合川柳編として「冷刺的洞察の裸体詩、熱愛的共感の社会詩」に進むべきことを標榜し「要するに人生を縦に横に觀察し社会を精に密に解剖する詩であれば好い」とのべたが、その傘下川柳家は専ら諷刺詩の労作に懸命で、昭和十二年の頃には反戰的川柳を發表して機関誌發禁の厄に遭つたこともあつた。穿ちも川柳味を特長づける重要な要素であるが、そのねらいが小事にこだわつたり月並に墮したのでは詩趣に乏しくなる。路郎先生の句

待つたなしの歩に刺れたる

犬養毅

は有名であるがこのような大きな穿ちを持つべきである。同じく路郎先生の句

椅子の背にもう青春が消えていた

に對し野介氏は「此の句の持つてゐる所の現実性と而もその現実の裏に突抜けた所の發掘された現実以上の眞実性——そこに本當の詩があるのです。」とのべられた。ここにも鋭い穿ちが胚胎してゐるのである。

詩性川柳の現状と將來

將來

近頃詩性川柳が昂揚され意欲ある作品があちらこちらで發表されてゐるが、概して難解な句が多く抽象的で興味索然たるものが少くない。詩の言葉は口先や小手先でひねり出すものでなく、心の奥底から出た眞実の声、眞剣な叫びが十七音の嚴しい詩型によつて規制され洗練されたリズムとなつて始めて肺腑を衝く句が生れるのである。安易なるグループ内での拳脚ごっこや自己陶醉からは到底優れた詩性川柳は生れて來ない。勿論川柳に詩性を盛り上げようとする努力は結構で兎角マンネリズムに陥入り易い句境から脱却して、句の新鮮味を或は一切実味を表白することを忘れてはならぬが、やたらに試掘

するような安易な態度は捨てなければならぬ。

昭和十六年三月号の本誌で亞鈍氏がのべられたように、路郎先生は既に青年の頃から詩性川柳について心を砕かれ評論に句作実践に努力を傾注しアリズム川柳の外にロマナンシズム詩川柳を柳壇に鼓吹されたのである。作家の主観、感動、独白、愛情等をひろく句の中に迎へ入れ、柳壇に詩美豊かな一主流を確立されたのである。從來の穿ち一点張写生一辺倒の川柳界に一陣の涼風が吹き込んだのである。かくて鮎美、豆秋、綠之助、民郎氏などを始め多数異色ある作家の輩出を見、柳壇は頗る多彩を加えたのであつた。この傾向は詩性川柳の正當な發展のため益々助長されてゆくべきである。

路郎先生は曩に「新川柳講座」を刊行され近來の名著として柳壇に貢献を致されたのであるが、これについて先生は次のとおり述べられた。「新川柳講座ではリズムに関する外は一應各般の問題に亘つて述べたつもりである。リ

ズムの問題を残してゐるのは、同書中の一項目として扱うには余りに廣汎で、優に一冊の單行本とするほどの内容があるので、これは別冊として出したいと思つてゐる。この言葉によつてもわかるとおり、先生の抱負と遠大な計画に敬服すると共に、この問題が如何に重要であるかを痛感した次第である。僅々十七音の短詩ではあるが、これを構成する韻律の種々相は実に廣汎微妙で興味まことに深いものがある。またテオハの使い方一つで句の調子に多大の影響があり、軽視することのできぬリズムとの関連のあることがわかり、更に遡つて五、七、五の定型律が生れた根源にまで検討を進めるならば、いかにこの短詩がわが國民性に密着したものであるかが諒解されるであらう。先生

の研究が完成された曉は、川柳の声調美、表現の波動性、音響的手法、句の弾力性、破調と字余り、言葉の匂い、色、深淺、輕重、強弱、リズムの效用、口語、連用止、結語句止めの當套的表現、音脚分析

等々一句々々違つた音律をもつた十七音の正体の複雑さが解明されることであらう。リズムは川柳の生命である。先生がこれを重視されている所以をわれわれは常に忘れてはならぬと思ふ。

ロマン派、主情派、モダニズム、主知派、現実派、風俗描寫派、心理派、諷刺派、写生派、印象派等々川柳作家の個性は様々であるが、要するに作家の個性を伸ばし川柳の本質を生かすところにその將來が約束されるのである。そして個性の培養はおのがじし詩の心を磨くことである。人間を磨くことである。人間陶冶の詩と云えば教訓的な響もあるが路郎先生の意図はそこにあるのではなく、川柳を遊びや道樂の方便とせず、また文字の遊戲に終ることのないよう、眞剣に嚴正に社会の狀態や自他の生活を凝視し反省する心を養ひ、強く正しく生きぬくよう人間の魂をきたえ、先生に役立てよう云うのが、先生の眞意であると拜察する。詩は人間の心を淨め高めるものだからである。



大阪市 武部香林

人生の斜面空氣をつかまえた
善人の弱さは梅雨の雨に似て

薄情な奴へさばく縁を切り

小氣味よく借金とりへ犬は吠え

老ぼけこそしるを知らぬ顔で蓄め

ストともなればいつちすばらが先に立ち

ヒスなるか口尖らせて爪を剪り

錢を乞う白衣は義手をあらわにす

ほれて見たい人だと仲居酌ぎこぼし

魂を圧して瀧のドドドド

平塚市 木村孤浪

晚酌の人もあろうに肥を撒き

派出ちやないと云はれたたくつて派出でせう

クリームをあてがいはおやちビール也

ニューシユーズギヴスを嵌めたやうに穿き

三女もう浴衣の似合う年になり

横浜市 福田山雨楼

おどけた蠅も一匹はいる

酒のむなの歌を学童歸り途

電車みな働く人の白いシャツ

新薬に一喜一憂して寂し

妻に足洗つて貰う極樂か

夕餉だけキードン喰べる予算立て

京都市 前山北海

敗けてから学生哀れ夢もなく
ブラジル日系に珈琲景氣沸く
ミリオネア続出移民見直され

ホノル、市内藤草一郎

「酔はしてよ」お客の酒で憂さ晴らし

糸くずを附けたまゝ出る倦怠期

ウィツスルに工場の恋はさかれたり

尾崎市 水谷鮎美

頓死してからスナツプ届く也

十違いとぼけたセンスとなりけり

さびしけれどとはつまらなし唐辛子

ハワイ 市岡曉舟

螢など光つてほしい布哇の夜

潮時と見たか帰化案通過する

肥えるのはいよいよませんが洋服が

無理矢理に使いなさいと軍艦を

米子市 三嶋美笑

十本でたりる煙草だピース喫う

風鈴の鳴る間でしばし待たされる

母の里避暑に行くには田舎すぎ

冷蔵庫晝の豆腐があるばかり

ハワイ 白砂旋風

給料を貰うに頭下げ通し

手品師のように減税すると言う

雄弁と闘志にみんな引摺られ

大阪市 市場没食子

五十の掌これから握る筋が殖え

御遠慮がたたり女も横取られ

末ツ子のヤツトン節を笑ろて飲み

大学に置きたい様な修身課

首きるにしてもうるさい首はよけ
身を挺しグルーブ救う嘘をつき

生々庵氏へ

忌が明いてからも嘘は母を追い

大阪市 須崎豆秋

連隊長殿に保険をすゝめられ

破防法通過パチンコしてる間に

ほろりつとするとする名文で金を借り

記念日記念日なんと暴れる日の多き

大阪市 正本水客

咳拂いて交番を通り越し

貧しさを意識しているズツク靴

千年の歴史へ山は晴れ渡り

調和と云うことが娘にのみこめず

雨脚の海が静かな大廣間

大廣間旗振るやうに藝妓去ぬ

トップ賞かせぐ選手の顔の雨

空白をこれから夫婦うめる氣か

がや〜と帰つたあとにある團扇

大阪市 丸尾潮花

すねてゐるやうに壕から動かない

立膝でお富のやうな口もきけ

スリルよなぞとアブレの名に恥じず

踊だけ出来ますという嫁が来た

大阪市 北川春巢

立飲みで元秀才の氣焔聞く

のりつけが嫌い女房せいがないし

教壇は欠伸したのを見逃さず

客引のこんな靴と思えども

恩師還曆

奈良市 尾崎方正

あつかましいことだけ目立つ世帯ずれ

人前でノーストツキングの脚を組み



脊の高き妻網棚へ載せる役
八千万の船出さ少し騒ぐなり

下関市 櫻川 不水

留守番をすれば集金ばかり来る
うつぶんは襖を締めてまだ続き
女には飽いた男の柔かさ

南海の月に嘯く君もなく
百ばかり数えて星が嫌になり

完敗の我に荊妻一人在り

大阪市 木下 幽王

台風に妻の樂觀主義が勝ち
金策に行くのだからのシャツを出せ
雨だれは肺の中までぬらすなり

おどけて見たが熱のあるのをかくせない
屋根瓦一枚一枚にある根氣

パラパラ以來うちの庖丁磨かない
あいのこの運命に詩はなかりけり

笑はれても兒の命日にある涙
ヴギウギも下火景氣も下火なり

病人が口惜がつてる靴のかび
雨激し休みたいけど手形の日

土地の値も知らず大根ひょうろひよる
とんぼつりとんぼの数より多かりき

大阪市 福田 安夢

浴槽の藝術しやぼんの泡と乙女
血をペンにつけて書きたしわけもなく

からませる足は乍不本意に御座候
殺されてよいのが二三人生きて居り

大阪市 水谷 竹莊

仲居から呼出し結び文で来る

貧乏を氣にせずのんき者にされ

まだ生きてゐるよと伊勢海老つままれる

旅をする商賣皆にうらやまれ
新しい恋へ必死な厚化粧

空想も夢もきれいな女学生
阿蘇垂玉温泉にて

岩風呂へつかり一人で虫を聞き

バチンコの前で子供を返しとき
脊の子を叱りバチンコ続けてる

トシコ節舌の廻らぬ兒に教へ

徒歩連絡しても引かない電車賃
或る時は女に強き集札氏

吊し上げ失礼しました又來ます
職を離れ人生の零年としておこう

倦怠期恋愛小説よみなおし
茂つてるポブラが落す梅雨雫

孝ならんと欲して家計赤字なり
市電バス朝のリズムとなつてゆく

まだ若さに自信はあるよ無帽主義

ばらを愛する男の人を

ばらのさかりははかないもんやと花を撫で
ほめるたびに名花の由來きかされて

雑誌ハンラン又天皇の批判記事
ドレスの服貴女日給はいくばくや

山口県 長野 井蛙

賣出しの規うボーナスどうに消え
豪遊が温泉宿から曳かれて出

家柄に裂れた意地の子を育て
床柱二人の妓に酌をされ

盃へあやかりに出る卑屈な眼

千円を裸のまゝで握らされ

引越した後へ家主は後家を入れ

俺の目が女の腰を見て居つた
この妻でよかつたと思ふのも齡か

泰然として叱られる老妻よ
御氣嫌が斜め書齋と台所

愛情がなど少女のかしましく
浮浪兒に施す物も無く淋し

葉櫻がどうのこうのと飲む話
貴子へ自轉車も買ひ服も買ひ

他人行儀をせめてたてゝくる未亡人

上役えさすがは辞書を引く手紙
ひき蛙俺に続けと云う型

親類としつて悪口座を外し
妻と行く相合傘のてれくさし

宣傳部も出來そうな稻荷講大師講
作業衣を洗つたら百円札が出た

母もやつと啄木の歌が判つたか
尼僧の金齒多彩な過去がつきまとい

天井から四角に折れた僕の影
蠟燭に影が大きく水害地

浸水に渡した板へ子は並び

字部市 上林 粗影

大阪市 西森 花村

八代市 佐野 ト占

兵庫県 小西 無鬼

尼崎市 小林 文月

大阪市 渡辺 孫拙

大阪市 富岡 淡舟

奈良県 飯降 白香

奈良県 西辻 竹青

山口県 長野 井蛙

大阪市 森下 愛論

大阪市 松江 梅里

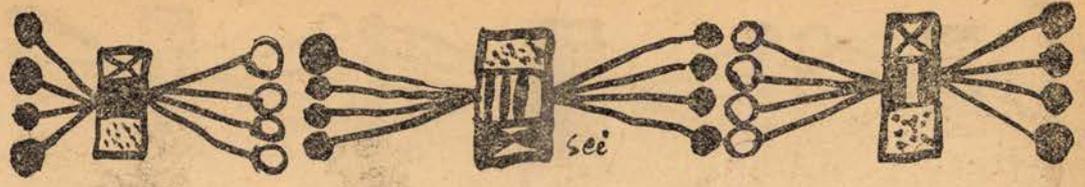
岡山県 丸山 弓削平

岡山県 直原 七面山

岡山県 黒田 笑泉

字部市 上林 粗影

大阪市 西森 花村



怪談は不入の方が凄く見え
轉寝の母子は二尺程離れ
人生に退屈するとは倅せな

夜の地震起きてこぬ子を忘れてた
文身をアクセサリーと言う娘

兵庫県 家 沢 薺 花

先生に送つてもらうひどい降り
先づ脱げと裸に裸すゝめられ

留守番の裸へ邪魔な御用さき
二千円ぼろりとくれるクイズ聴く

滋賀県 黄 瀬 美 秋

夕立はこれではないと虹を出し
声から先に入るも久し振り

極意皆傳のやうにどぶ酒醸造法
嫁もろてからの筋のあるズボン

岡山市 藤 本 満 年

ヤットン禁酒する身にまだ聞え
殺生をしたくないのに蚊がどまり

警察へ手向う暇もなく夜学
花生けて一々花の名を聞かせ

母を憶ふ

何一つ不孝を責めぬ母なりし
手を取つて僕を迎えた母の亡し

熊本県 西 口 如 川

祭壇の母は細めた眼で笑い

絶景の徐行金切声のパス
つまらなそうに倦怠期の素顔

岡山県 福 島 鉄 兒

甘えたい氣持齒がゆし借電話
下手くそな字が小切手へサインして
婦長さん自分の歳を忘れてる

いつも株でも買つたろうかなと思
ぶらんこヘアララスカートひるがえし

岡山県 直 原 湖 月

出目金かみなを押しつける金魚鉢
灼熱の恋を想はすバラの色

花嫁の箆筒悠然と見栄を切り
「兄です」の「従兄です」の社交ぶり

岡山県 黒 田 久 米 女

弱点を突かれぬ先に話題かえ
生活のアカがしみてる肌の色

岡山県 黒 田 久 米 女

川遊び母の注意を脊で聞き
耐乏の生活へ学費のしかゝり

打水へ螢が愈しい庭となり
教育法が違うと姑なだめられ

岡山市 藤 本 茶 々

成功者とは父母の石碑立て
声上げて泣けて女の倅よ

鯛買えば何事ですかと肴屋が
幸福はこゝにもあつた風呂上り

新調はバットお尻をはねて掛け
バカヤロと父それ程に怒つてす

ビールのみしてくれず夫話せない
母今は亡く

兵庫県 榎 南 夏 六

何故夢になりと会うては下さらぬ
偉らそうに出来ない性質を淋しがり

あきらめがよくて四度目の嫁とやら
無愛想を性格にして平社員

大阪市 西 い わ を

金持つて死ぬぬに預金帳みつめ
お人好し抜擢組に洩れている

春景があつてチャホヤされもする
岡山県 服 部 十 九 平

岡山県 服 部 十 九 平

めい／＼にみつ豆代を拂うて出
盆栽を整形外科が趣味とする

村の寺牛の相場も知つており
兜町栄枯盛衰記を書かせ

岡山県 大 森 映 句 樂

パチンコ屋出血サーピスなどと書き
莫大な家賃の爲の共稼ぎ

大分県 桑 原 養 痴 園

赤禪今では蚊帳の紐になり
危ながる兒を抱きたがる隣の子

バスは上る盆地の温泉けむり左様なら
商品を隠すに建てた隠居部屋

兵庫県 若 林 草 右

遠足は雨のネオンを見て帰り
借りた本のページへ南京豆の皮

戦争か平和か畑の麦は伸び
大人の夢まで玩具屋賣つてくれ

その昔の奉仕の工場でアヂつてる
ボーナスを派出に着て来た女事務

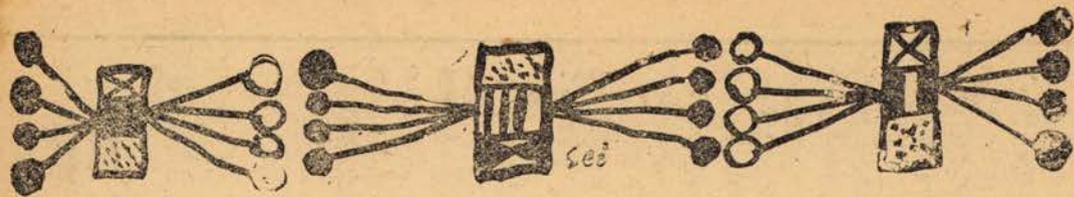
熊本県 有 働 芳 仙

婦人雑誌の浴衣女の自己慰安
競争もなくサンドウイチマン街に行く

借書書の裏へ子供のクレオン画
妻君の視線に盃伏せるとす

香川県 大 西 迷 窓

岡山市 延 永 忠 美
継母と知らず御世辞が似てますね
共鳴をする友達に金がなし



大阪市 浜 畑 初 蝶

主題歌を唱いまだ〜恋もする

唇を許した嫌な奴に遇い

結局は鳴かず飛ばすでくびになり

お帰りがちよい〜妻に睨まれる

下関市 阪 田 良 坊

お悔みもまだ云はぬうち涙落ち

瑩狩好いた同志は遠く行き

下関市 石 川 侃 流

養子ではないけど妻が強すぎる

教養の高さを知った低い腰

広島県 山 田 季 養

蓄めるだけ蓄めて胃ガンで入院し

借金があつても登山のプラン立て

大阪市 山 本 葉 光

小遣いがある日の老母がたしかめる

病む母に涼しい夕立降つて呉れ

大阪市 東 喜 久 堂

氣短がじつと堪えているパーマ

どの家もジャン〜街は震寝なり

去ぬやるともてなした客尻を据え

汚職かと派出に遣うて疑われ

働ける果報暑さも苦にならず

華やかな過去を語るが多藝なり

倉敷市 木 村 千 代 男

老父母を有つ感激もありはあり

大掃除御用提灯さげて見る

頑強なヒスに父子がハラ〜し

泥仕合して〜も歳費だけはさり

今少し踏み込んで欲し女氣の

きうりもみばかりであればら骨を出し

簡単に墮すだけさが憎らしい

御随意にご相手にされぬまゝ帰り

校長がパチンコやつた夢を見た

石川県 那 谷 光 郎

頓死して性に合つてゐるなど云はれ

酔うてもズボンの寝押し忘れぬ

ホントの事横から喋る子に困り

何時死んでもよい年ですが養命酒

ジャラ〜の音へ現実苦を忘れ

仲人口でないご仲人念を押し

花に酔へ汚職の金でない限り

寄附話PTAをしんささせ

大阪市 木 村 水 堂

田圃匂う眼に贅沢な晝の風呂

百ミリの雨へ長靴間にあわす

長生をしてほし義母の肩をもみ

倒される分も這入つた月賦の値

熊本市 花 岡 英 子

この道でいつもあなたを思い出し

唯心論やつぱり壁にぶち当り

よくいえばなどと女はつけ添えて

堺 市 八 木 摩 天 郎

出張の名刺はまさにさ〜れたり

足の裏で雷の鳴る氣味悪るさ

高槻市 福 田 丁 路

一念こつた女の乱れ髪

絶好のチャンスと近火御見舞

薄氷を踏む心地なる河豚料理

殺すなら殺せに近所息を呑み

岡山県 水 谷 谷 水

ひのゑうまですと助産婦美くしい

質上げをやれどすばらが動議出し

氣の毒に二号が薯を喰べていた

警察の行過ぎだとは淋しいね

現実の悲哀万引見せてくれ

岡山県 佐々木告天子

煽風機平等愛の首を振り

雨雲の速さと自轉車の速さ

愚妻肥え愚夫は益々瘦せ細り

ボクシング親にはすまぬ顔となり

岡山県 相 原 一 善

結婚も早し離婚も又早し

停年も近し意見を言はずおく

アベツクを二つに割つてへびは行く

岡山県 田 村 藤 波

腐らして捨てる野菜の値を下げず

祖母さんの年ほど蚊帳の色が褪せ

一物も作せすたべる有難味

岡山県 峰 尾 魚 々

ウナ電を書く鉛筆に紐がつき

轉勤は貰いばなしで去つちまい

岡山県 岡 田 夜 潮

笠懸の舞に帝の唇動き

倍氣でもちとして欲しいお人よし

水番が見つけて事が小火で済み

よちよちが水番帳を持つて来る

岡山県 坂 井 三 葉

倦怠期他人の様な日が続き

口添をしたのも一緒にしかられる

女生徒の憧れサインブック掲げ

岡山県 政 田 大 介

黒白を妻と争う不倖せ

慕はしい人に再婚す〜められ

蚊やり火に一所に俺もくすべられ



評句座圓

(う拾を句りよ号月八・七)

出席者

- 麻生路郎
- 高鷺亞鈍
- 北川春巢
- 寺井銳々
- 足立春雄
- 市場没食子
- 司會

もないみなめしを食うの、みながこの句を強調している。春巢は八月号の近作柳樽から次の句を提出します。大都会鯛も化粧をして居ます (文庫)

大都会の人間達、女も男も醜い女が顔を塗りたくり、男もパーマをかけている。リンゴも毎朝顔を拭かれて店に飾られる。鯛までが化粧をして並べられて居る。そう云う光景を鯛だけで、代表させて「鯛も化粧をしています」と詠まれているのは、うまいと思えます。(同感の声あり)

大都会の「大」が効いています。化粧をして居ますの「居」もよい表現と思えます。没食子、實際浜辺に居る鯛は鮮度も高いし大阪で賣っているものより遙かに下等なのですが扱外観の色艶と言うことになりまして、その正反對のようになっています。この句に都会と言うもの、生活の厳しさを一面が出ているのではないのでしょうか。

路郎、この句の良し悪しを言うのではないのですが、鯛の化粧法と言うのはどう云うことですか。亞鈍、あれでしょう。あの宴会のときにピンと尾鰭の：

路郎、化粧法と言うのは食紅をつけて賣物に花を飾ることを云うのであろう。死魚を氷詰にして大阪あたりへ送つて来るその美しい鮮紅色がさめてしまうので食紅で色付けをして賣るのをゆびさしているのであらう。折詰などに尾鰭をピンとさせた姿も化粧法の一つだと云えぬこともないが、この化粧法をしていると云うのは、店へ並べるのに、色つけをすることを詠んだものである。

没食子、二、三日経つた頃が色がよくなるのと違いますが路郎、魚は生きて居る時と、死んでからは全く色艶が異なるもので大阪あたりの太刀魚は芝居の竹光のような銀紙色をして居るが、海岸で、どり立のまだ生きて居る太刀魚を見ると全く太刀魚の名にそむかないものである。それに味も違う。

銳々、いや、三、四時間位が一番喰べ頃でしょう。路郎、魚をして、生きて居るのをすぐ料理したのが一番うまいのです。死んでしまつてからの料理では鯛そのもののうまさ云うより味つけの味だ。牛肉などは一週間ほど経つたのが肉がやわらかでい

没食子、それではぼつ／＼始めましょうか。銳々さん久しぶりですなあ。銳々さんから一つ……。

銳々、さうすなあ、それでは七月号の川柳塔から提出させて頂きます。

子澤山皆めしを喰うおそろしき (淡舟)

子沢山な家庭の雰囲氣を單的に表現しているのと、親の楽しいような悲哀感を感じるこゝとが出来ると思う。敘法としては外にも言いようがあるでしょうが、これで先ず纏つて居るものと思えます。

没食子、この句は、戦前戦後を問わず通ずる句だと思えます。私も十人兄弟の兄ですが親父が相当飯と言うものに関

心を持つていて、隠居をして居る今でも成可く閑買いをしないように云うし、閑買いをするとぼやくのを思い合して、戦前戦後を通じていたでける句だと思えます。然し戦後に於て一層引き立つ句として、共鳴出来ません。

春巢、私も子沢山を以つて自任している一人であります。がまだ子供等が小さいのでこの句にある「おそろしき」と言う感じは持つておりません。然し此処に述べてあることは將來に於て起り得ると思つて句を見て恐しくなつて居ります。

没食子、實際子供が、しかも喰べ盛りの子供が五、六人喰べて居る姿は丁度「の」んで

し止めてもほしい酒をつぎ(霞乃)の眞意に一致するのではないでしょうか。喰べて貰わな大きいなれへんし、然し一寸痛いからな……。

銳々、子供的生活意欲のことを考えれば頼もしく経済的な懐具合を思うとやゝ恐いような感じがするところに共感を呼ぶわけです。

没食子、着想は必ずしも新しいとは思いませんが一句に纏め上げた姿は非常にいい恰好だと思えます。

銳々、欠点のない句ですなあ。路郎、そういう方面に無関心な親もあるが、こうした感

をいただく親もあることは確かだ。その点では「戦前も戦後

路郎、化粧法と言うのは食紅をつけて賣物に花を飾ることを云うのであろう。死魚を氷詰にして大阪あたりへ送つて来るその美しい鮮紅色がさめてしまうので食紅で色付けをして賣るのをゆびさしているのであらう。折詰などに尾鰭をピンとさせた姿も化粧法の一つだと云えぬこともないが、この化粧法をしていると云うのは、店へ並べるのに、色つけをすることを詠んだものである。

「こいわれてゐるが魚は新しい程いいと思う。」

浮食子「この句はそう云う實質でなく外観だけを言つてるんですな。」

路 郎「そうだ。この句は實質にふれていないよ。」

浮食子「それでは次に春雄さんどうぞ。」

春 雄「私は七月号の川柳塔から出します。」

浮氣の首筋へぼとりつと雨が落ち

感情的な浮氣と言う中に、感情が燃え立つて来るような、氣持が燃え立つている処へぼとりと雨が落ちて燃え立つていた感情を自覚して、自覚の中に自己を見出しているような複雑な内容を雨で簡単に表現しているように思います。

この句は、これを読む人の氣持によつて色々な程度に味わえるような氣がします。

亞 鈍「鮎美氏の句としては七月号の浮氣の句に限らず同時に發表されている後の「集金のきつちり來てる薄化粧」

「鮎つりのウキ春雨にぬれてくる」の三つとも甲乙なしにいゝ句だと思えますね。特に春雄氏の提出されたトップの浮氣の句はいゝ句でしょう。

路 郎「この作家の作句態度

を知つてゐる私には所謂「善人」の反省感が落着いて表されてゐる処が微笑ましく感じられます。

浮食子「この句の場合、このボトリと言ふのが当はまつてゐる。これで句を引きしめてゐるのと違ひますか。」

路 郎「さうですよ、その点はありますなあ。」

浮食子「それと今、春雄さんの言われた雨の一しづくが情熱を冷却さす。この辺にこの句の味わいがあるのだと思ひます。鮎美さんの独壇場ですな。」

亞 鈍「鮎美さんが善人鮎美と言つたけど、鮎美が善人のまゝでの浮氣男だつたらぼつりと落ちる一しづくの兩位わからぬいんぢやないだらうか。(笑聲)さすがは川柳作家としての鮎美の人の悪さだ。」

と云われた言葉の中に善人鮎美の面影が彷彿として浮んで來ます。

路 郎「客観でしような。」

亞 鈍「これは矢張り本人が反省をしてゐるんでしよう。それを川柳にしているだけ人の悪さがあるんだ。人が良かったら体験は体験のまゝ終つてしまふのぢやないのですか。そうした自分を批判する別の鮎美は人間が悪い。大體藝術家は別の意味で人が悪いね。肉屋さんや、下駄屋さんよりは……」

路 郎「現在では客観でも前にしような。」

亞 鈍「反省しない僕は句にしない。」

路 郎「そう云うことも云えらね。藝術家は人は良くつても常に自分を批判する裕りがないければならない。」

浮食子「私は八月号の近作柳樽から扱きます。」

本宅はいわし二號邸は鯛

(説明)

また鯛や(笑聲)本宅は鯛、二號邸は鯛とありますが、一概にさうとは云えないと思ひます。本宅も鯛、二號邸も鯛、さうした二号さんも沢山あることだと思ひます。二号さん

町に住んでゐる私は二號邸が鯛であることの多いことをよく知つてゐます。勿論レベル以下の二号さんですよ。御近所の二号さんで最近五百万円の家を買つて轉宅せられた人がありますが、この人は三度も料理屋から御馳走を運ばして、またその他の二号さんは且那さんには御馳走をしますが自分一人の場合、もろきゆう一本ですましてしまひます。大體そんな生活を續けている御近所は二号さんばかりです。でこの句を出してみました。

路 郎「先ずこの句を読んだだけでは本宅ではしまつてをさせて二號邸では贅沢をさせていると言ふ皮肉として考えさせられるのですが、色々の視角から見れば、色々の経済的生活面の状態も沢山想像されるわけですが、たゞこの句の表現が持つ力は割合に深刻さが少ないように思ふのです。」

春 雄「僕はこの句を読んだとき奥さんの立場になつて、女房稼業も辛いものだなあと思ひました。句そのものゝ表現に就いては鋭々さんと同感です。この句を女性の側本妻の側から見れば、どの男も他所の女性には親切なもので

す。然し本宅に夫の経済を考へてゐるのはこの女性ではないのでしようか。」

亞 鈍「これは非常にむづかしい解釈を僕流につけるかも知れないが、女の側からも男の側からも解釈した処で、歸する処は経済問題にあることですから然しその三角關係に立つ男の側から、両方を善意に見た場合、本宅の鯛も是、二號邸の鯛も是であるを解釈したい。少し長くなつて済みませんがそれを詳しく言つと、本宅の経済では女房も子供も親父すら同じく毎夕の膳のおかずは平等でなければならぬいとすれば、家族全部が鯛をせつてを一家團欒はこゝ足れりであるべきである。殊更に親父だけが鯛とか或は家族以上に二皿、三皿の品数を揃えなくても妻の愛情を云云することはないでしよう。処がたまに行く妾の家では旦那さんが來た場合、充分の欲待をする女の氣持、本妻の場合主人は第二位で家族本位、妾の場合は旦那第一主義と言つた區別がつくとすれば限られた経済面に於ける一號、二號を持つ男、以て女心に限すべしだ。」

路 郎「この句はそうした色

浅田博士を悼む

麻生路郎

浅田一（右門）博士が亡くなられた淋しいことである。博士は法医学の權威で世界的学者であつただけに日本の損失は大きいと思ふ。頭のしつかりした学者の六十五と云えば老年とは云えない。まだ十年や十五年は生きていて欲しかつた。殊に遺言によつて解剖された結果脳や動脈は卅代の若さを保つていられたと聞いては残念でならない。しかも宿阿の肺で亡くなられず、死因が胃潰瘍出血であつたとは猶更である。東京都世田ヶ谷区代田町一の三五の一一の自宅で亡くなられ、東京医科大学法医学教室葬として自宅で告別式が行われたそうである。

博士は大坂の出身で、荆妻茂乃の亡父河盛彦三郎翁（芦村）がその昔、松島小学校で教鞭をとつていた頃の教え子である。夫人も葎乃も同窓であつたが、博士とは年齢に少し隔たりがあるので、その頃のことには就て思ひ出となるものはないが、ずつと首席だつたので父がよく、浅田々と云つていたことを覚えていたと云つてある。

私が浅田博士を知つたのも河盛芦村翁を通じてである。博士は至つて恩師思いで、たま／＼所用で

大坂へ来られると、必ず芦村翁を招いて一夕設けられていた。その昔、歐洲に留学されていた頃でもローマから泰西名画の版画を贈つて来られた。これは私が岳父から譲りうけて今でも愛玩しているが、期せずして遺品となつてしまつた。

昭和五年の十一月十日に、岳父芦村翁が亡くなつたがその葬式の中へ、浅田博士からの長崎カステラが届き子弟の縁の浅くなかつたことを思わせられ私達を涙ぐませられたものである。それより一週間ほど前だつたか、岳父の病臥していることを知らずに、大阪へ放送の用で来たからと云つて拙宅へ来訪されたことがあつた。



血で施すすべもないので、「先生何か喰べたいものはありますか」と尋ねられ、カステラが喰べ

たいとのこととそれでは長崎へ帰つたらすぐ送りましよう云つて歸られたのであつた。その頃、博士は長崎医科大学の教授だつた。斯うした縁で岳父が亡くなつてからは私達夫妻との親交が深まつて行つたのである。川柳では右門と号されたが余り多くは作られなかつた。しかし時々原稿を寄せて私達の仕事を支援して下さつた。川柳不朽洞会の賛助にも名を列してくださつた。私として忘れ得な

いことは昭和十七年の初冬の頃、手紙で健康のすぐれないことを知らして来られたので、多分胸の病であろうと察して、釈迦に説法とは知りながらも、私が私の肺尖を癒した経験から食養生の方法を知らしたところ、配給問題で忙しい家内に、とてもそんなことはやつ

てもらえない、まして今の食事情では物が手に入らないと云う手紙が来た。そこで私は、そんならと又次の案を持ちだした。今思うと私も一所懸命だつたのである。あなたは語源の研究が好きであるから、ベットに寝たまゝで疲れない程度で一日語源一つをハガキ一枚に書いてよこしなさい、私はそれを整理して「語源賞書」と云う題で雑誌に載せるからと云つてやつたところが、ソレなら出来ると、ソレから根気よくハガキが舞い込んだ。「川柳雑誌」の昭和十八年一月から掲載しはじめたところ、十ヶ月して、もう起き上つて、学校に出ているとの知らせに、ではもう「語源賞書」の掲載は中止しましょう、この雑誌は語源研究の雑誌ではないからと打ち切つたことがある。この方法は語源に限らないので、この手で胸の悪い人を軽快にした経験があるので博士にもすゝめたのであるが、斯うして博士と私たち夫妻とは段々と親しみを増して行つたのである。

今年の春には日本に於ける学者の待遇問題について不満を訴え、寝ている病人が、達者な家族を養うために執筆しなければならぬ現状だ。せめて湯川博士の十分の一の待遇でもしなければ嘘だと云う意見であつたが、同感であつた。その点浅田博士もあれだけの学者でありながら物質的には恵まれてはいない。それにつけても日本の政治の貧困ががつ／＼と想われる。今からでも遅くない、せめて遺族の方にも何んとか出来ないものだろうかと思ふ。葎乃の疎開の家の問題についても、持主が東京だつたので色々心配をかけたことがある。ホントに親切な真面目な人であつた。博士の著書などもいたしたが、博士の専門的な方面に対しては、私たちの云うべき何ものもないので私的な方面に就てのみ書いたことをお祈り願ひたい。最後に博士が病臥中にもされた辞世句とも云うべきものを発表しておこう。

妻に如く看護菩薩が又あるか
私としてはこの川柳一句を得たことを心からよろこび博士の冥福をお祈りする。



路郎選

父ちゃんの或る日会社のユニホーム 今治市 月原 宵明
 本建築出来ぬのにはや再軍備
 上役に貸して百円貰はれず
 母と言ふ乏しき髪に油され
 従順に生きとし生ける修道尼 大阪府 青柳扇子仙
 ほのぼのと顔にうぶ毛の修道尼
 修道尼顔だけまるく出して
 修道尼もの静かなる眼が二つ
 修道尼同志あるときねたみあい
 馬車馬に似て勤勉のせつなさよ
 悦びも知らないまゝに母となり 広島県 黒本 芳泉
 取るものは取つて信仰が足りません
 夫には内証の米で帯を買
 乏の夢は十萬円ばかり
 住むとこじやないど東京から戻り
 軍需工場などと戦争する氣かや 具塚市 池崎 箕水
 屋号そのまゝでパチンコ屋に交り
 診察へパチンコ玉が轉げ出る
 外泊許可されて
 此処からがシャバへ帰つた歩き様
 僕一人病院へ帰つて行く電車
 パトロンの來る頃男まだ去なす 津山市 定金白柳子
 世は情巡查が呉れた巻煙草
 靴みがき頃になるほど樂でなし
 予備隊へ大佐は髭を伸しかけ

ミシンまで持たせてやつたのに帰り
 理を曲げて迄の政治の恐しや 出雲市 同 久家代仕男
 謙遜の様に云われて汗をかき
 パチンコの話半ばでバスが着き
 終電へ講義のテンポちと早め
 牛ばかり叱られてゐる農繁期
 養老院來世とやらを信じてる 今治市 同 長野 文庫
 小包で済むに役人持つてゆき
 憲法が十七條の頃羨まし
 鶏割くに牛刀に似た檢拳陣
 簡單に貰うても石鹼必需品 和歌山県滝谷 右郎
 儲からぬ会社しよんぼりみな坐り
 アイヌ系かなあとひげを剃り始め
 名物のいつち小さい箱を買
 破防法と首つ引して原稿紙 大阪市 石田 沐天
 法律の鬼と呼ばれて書士で老い
 大言壯語でも株は日に下り
 見返してやつた積りが二号なり
 安い筈二重底とは知らざりき 広島市 同 福岡葉留路
 悪人が得たような恩赦の日
 流し元水ポトポトと妻の留守
 日除けにもする朝顔の種を蒔き
 パチンコに行かなき服が出来ていた 出雲市 同 佐藤まさる
 稅務署へ今日の社長はみじめなり
 殘業殘業といつしか孕んでた
 善人の証抱見事に禿げあがり
 婦人帽なほさら低い女にし 呉市 同 松永四季無
 程々に帰る氣あいつちばかりうち
 後悔はしないと女つぶやいた
 言論の自由は父の坎にふれ
 ライバルとして金満家登場す 具塚市 同 上坂 朱人
 あんな奴を偶像視してた日記帳
 戦後派に遠く村から女中に出



柳川 今月の歴史 九月の巻

主要事件、行事、動靜、人事等

明治四十二年九月關西川柳社(大阪)創立。大正十五年九月二十四日全關東川柳吟社十四団体連合の第一回川柳祭が上野頷松亭で催された。昭和二年九月きやり吟社は關東川柳連盟から脱退した。同四年九月二十三日BKからグレンショウが「碧眼餐六川柳觀」放送。同六年九月二十日からきやり吟社主催第一回川柳趣味展覧会を銀座三越で開催。同十年九月八日鎌倉建長寺で劍花坊句禪除幕式が行われた。同年九月二十二日三局合同全国放送「川柳の夕」で講演及選句発表があつた。同十四年九月大谷五花村貴族院議員に当選。同十五年九月二十日から銀座三越できやり二十周年記念川柳展開催。

主要圖書の出版

明治三十六年九月(以下何れも九月につきこれを省略)阪井久良較著「川柳梗概」が金港堂から。同三十九年小林紫軒著「川柳名句集」が盛林堂から。大正三年凌雲庵主著「川柳大全」が有明堂から。同六年井上劍花坊著「新川柳六千句」が南北社から。同八年矢野正世著「当世新柳樽」が忠文堂から。同十二年宮武外骨著「縁切寺」が半狂堂から。同十三年同著「川柳と百人

水泳の電車に氣胸の患者揺れ

傘もつた手が軍刀の型となり 東京都 松井 清志

魂の抜殻へ塗るルージュ濃し

外氣椅子みどりの風もそつこくる 同 同

バラ／＼にするワと女房強くなり

米兵の帰國富士へも投げキツス 岡山市 宗高八ツ茶

露地口を出ると墓金にもう出合い

麻雀の客へも蚊帳を吊つて置き

アベツクへ土工の一人時を聞き

婦徳とはかうも恥づかしがるもか

脱ぎようも思わせぶりの妻であり

拜啓のかわりにお父さんで来る

P.T.A此処でも金が上座に居

半ズボン雨の木賃に寒く着き

鬼あざみ隣の後家さんにも似たり

バラツクの世帯は客に見透され

八方葉氏退院 鳥取市 森本法泉水

退院の下駄買つて来て喜ばせ

重役の会食今日は書の話

捨てた娘の写真へそつと接吻し

力瘤入れた息子にや先だたれ

荷拵え出来ればトラツクストこ来

測定をしてゐるような歩の運び

頑固さが失せた父親寂しがり

炙をする母をのぞけば寝ては居す

歌舞伎座のホールで靴の泥を知り

拳骨に螢を入れて駆け戻り

割り勘はビールの数も読んで飲み

杓飲みを親がして居て子を叱り

陶病で性慾だけが子を産ませ

嫁入つてミシン反つて邪魔にされ

いゝ様にしろでも困る妻であり

叱つても怒つても母の膝が好き

盲判の社長の信に背くまじ

ダイヤルを廻せば各地忙しや

愚痴ばかり聞かされて見舞客

睡る子の今叱られたとも見えず

泳げない二人が遊ぶ櫻貝

潔癖は灰の中までゆきとどき

弟子までが無口で流行る美粧院

うねり多き波の如我が心ゆる

病室へ私服のナース華やかに来し

罪人の母の素朴が眼に痛し

家内中と申して一人冷奴

出世した便り冷蔵庫も買った

ペンで立つ志望都会の隅に生き

俵から猿 沢池は覗かれる

欲しいものだらけ月賦ははかど

書置にしときたい芋の蔓の飯

悪い籤引いた顔して巢鴨を出

せゝらぎの河童に汽車は嘩される

ヒヨいと警句が出でしても女学生

榮轉が酷暑にタイをさらせない

愛してるような素振もありはあり

耳遠き父が風鈴買い給う

わさび漬買う氣になつた汽車の窓

死にゝ行く旅とは知らず子は噪ぎ

独り者いつまで目刺買うくらし

本調伊豫節仕入れただけの旅だ

脊を拭いてくれる妻あり夏を病む

一首「川柳や狂句に見えた外来語」が半

狂堂から。同十四年今井卯木著「誹風柳樽

拾遺に就て」岡田三面子著「誹風柳樽全集

に就て」が何れも柳書刊行会から。同十五

年松村範三著「川柳日本俗説史」が磯部甲

陽堂から。同年田中鳴風著「川柳六歌仙」

が柳書刊行会から。昭和二年川上三太郎編

「新川柳一万句集」が磯部甲陽堂から。同

年井上剣花坊編「大正川柳句集」が柳樽寺

川柳会から。同三年田中五呂八著「新興川

柳論」が氷原社から。同年近藤倫二坊編

「川柳女性一万句」が磯部甲陽堂から。同四

年西原柳雨著「川柳風俗史上」が春陽堂か

ら。同五年岸本水府著「川柳手習」が誠文

堂から。同年北夢之助著「北夢之助句集」

同年辰巳利文編「籬風集」が巖櫃社から。

同年川上三太郎、矢野錦浪共著「川柳漫画

全集浮世行進曲」が平凡社から。同六年松

川弘太郎著「川柳江戸俗信類集」が江戸探

訪館から。同七年岩本素人編「昭和年高田

柳集二集」が川柳同好会から。同八年高田

太郎編「誹風柳多留全集」が柳多留全

集刊行会から。同年住田乱耽編「川柳句集

潮騒」が不朽洞から。同年齊藤松窓、藤本

福造共編「柳舟、六好、富士子句集」が川

柳叢書刊行会から。同年飯島貞助著「花月

隨筆」が富山房から。同九年木村半文錢編

「当百類題句集」が川柳叢書刊行会から。

同十一年植木鬼仏著「句集浮雲」が川柳研

究社から。同年京都川柳連盟編「川柳忌句

集」が同連盟から。同十五年三条東洋庵著

「ひとすぢの春」が三条政治から。同十七

年前田雀郎編「川柳漫画餘後の彈丸貯金の

巻債券の巻」が教育社から何れも出版。

主要柳誌の興廢

大正十四年京都の「京」復刊。同十五

年大阪から「蛇籠」創刊。昭和三年京都か

ら「紙魚」創刊。同六年一宮市から「醍醐」

葛城山早く癒つて来いと立つ
 ビツケルが中央線に乗り替える 大阪市 吾郷 玲人
 子を追ってシユミーズだつたのを慌て
 女子寮の廊下に二本ビール瓶
 床の間の客へ扇風機必死 京都市 村本 香果
 ストリッパー乳に疲れを見破られ
 降り出していつそよつた見合済み
 別れると決りこんどは慾でもめ 具塚市 篠原 小坊
 紙芝居酔たモリフはどくいと
 婦長去り言葉くづれた電話口
 女房にすゝめる頃は酔ひごち 今治市 越智 一水
 雑然とのびて雑草親しまれ
 來客が友とわかつて裸で出
 お見合ひで振つたお方が出世して 兵庫県 酒井ひかる
 十位い仲居苦もなく嘘をいひ
 身に覚えある事母は娘を案じ
 星を見に出て看護婦に叱られる 大牟田 小川 青泡
 やせてやせて御見舞の言葉出す
 魚の名判らぬまんま喰べ終り
 家出して南京虫に食はれる身 岡山県 國枝 朴仙
 瘤のある方が私の。パパでした
 恋人が出来てタイプにミスが殖え
 幾春秋絵日傘を描く職に生き 大阪市 永田都詩子
 石段の数で若さはもめている
 古橋を真似叱られる晝の風呂
 或る日ふと小説を書きたく思い ハワイ 滝 純香
 金が出来ると神様を拜みに来
 義理をつくして嘲笑を買つたのみ
 農地法地主白壁だけのこり 福岡市 岩田十三楼
 涼み台昨夜の駒を兒は拾い
 立話し露地をふさいで続けられ

アベックが共同募金素通りし 岡山県 小林 夢介
 一合で最う肌を脱ぐ父の老い
 夏枯れがこんな田舎へ幸四郎
 好きな娘へ課長のちよつかい氣にかゝり 和歌山県那須 虹兒
 銀行員妻のハンコも掃除をし
 お裁縫いち／＼炊事の母を呼び
 尺八のような竿でも釣れんかい 岡山県 長尾 越鳥
 ポンと背な打たれた方が御氣嫌で
 ドラ声の女十半でよく稼ぎ
 脅かしに撃つたつもりの弾で死に 岡山市 河田 五風
 裸一貫女外貨を獲得し
 あの日から印まかされる女秘書
 女房に凶星さゝれた慌てよう 宮崎市 野口卯之助
 かけ引きの強い男ですぎが無し
 人生へ泣きに生れた君と僕 東京都 田中 稻水
 チンドン屋音色変つた水溜り
 半熟というセーラーの胸の線 愛媛県 村上 旭童
 絵の様な島でやつぱり妻が熱れ
 代筆の便り文句が上手過ぎ 愛媛県 藤田 博人
 同権はいゝが家ではもて余し
 起された不平へ薬局無精過ぎ 石川県 塩谷三思楼
 綻びを縫う横顔のからかわれ
 ビニールのバンド人妻とわ見えす 兵庫県 吉原 紅月
 借金も貯金も出来ず今日も無事
 父ちやんの勝氣税吏とわたり合ひ 岡山県 山本 蕉兒
 出まかせに拂うと云つた日が迫り
 行商のお世辞並べて断られ 大阪府 森本黒天子
 開襟の腕へ若さの腕が觸れ
 酸素瓶魚雷に似てるとこが嫌 米子市 小西 雄々
 幕間の挨拶選挙近くなり

が創刊三巻一号まで出る。同年樺太から
 「若柳」創刊。同七年金沢から「梅鉢」創
 刊。同十年横浜から出ていた「短詩」は二
 三九号を以て廃刊。同年大阪から「川柳天
 守閣」創刊。同年島根県から「阿手奴後」
 創刊。同年名古屋から出ていた「東海」廃
 刊。同年京都から「同人」創刊。同十一年
 東京から出ていた「おもいで」廃刊。

著名川柳家の他界

松村柳珍堂大阪で大正八年九月十四日長
 逝、子規門俳人鬼史としても有名で柳壇の
 鬼才。西山富士子は同年十三年九月二十一
 日三十三才で病歿、京都柳壇で活躍した。
 伊東夜叉郎(東京)は同十五年九月九日三
 十九才で世を去る。久良岐社中出身後川柳
 詩社を興す。大谷紅ン坊(白河)は昭和四
 年九月十一日永眠、劍門の古参者。佐藤十
 九坊(福岡拳骨吟社同人)は同七年九月二
 十三日病歿。井上劍花坊は同九年九月十一
 日鎌倉建長寺で静養中長逝、六十五才、新
 川柳を興した功労者恩人であつた。桑山清
 美(大阪)は同十年九月九日二十五才で病
 歿、川柳雜誌社御旅支部同人。小西文柳
 (東京元天馬吟社同人)は同十一年九月十
 五日三十二才で他界。新倉裕侍は同年九月
 十七日長逝、横浜柳界の重鎮で知古川柳會
 主宰。藤堂十紫(番傘同人)は同年九月二十
 三日三十六才で病歿。島紅石(横浜)は同
 十三年九月八日中支で戦死、川柳地帯同人
 として活躍した、三十二才。松本一夫(湯
 田中柳風會同人)は同十三年九月十三日二
 十三才で病歿。西野みつは(広島)は同十
 六年九月二十五日闘病に倒る、川雜誌上の
 異彩。長谷川三汀(香川)は同年九月二十
 九日三十九才で病歿、元川雜同人で豆秋の
 令弟。本多森芳は同十七年九月三日長逝、
 北米川柳界の長老、きやり吟社々人。

うちの犬うちを離れて気が荒み 高田市 岩垣日本村
令嬢へ幼馴染はオイと言う 同 乙倉有樂子

絵のような景色に住んで暇がなし 岡山県
郷里へは二階借りとは書かず出し 同 井上 吉造

ライバルも来て出発の芝居めき 京都市 同 三上きんや
曲りますなどと可愛い子の電車 同 池田 両成

病婦目でせい一ぱいの愛を告げ 京都市 同
絵の会に女がはいるからはいり 同 池田 両成

のろけと知らず相槌打つてゐた 貝塚市 同
乳母車押しして医博の若かりき 同 池田 両成

和尙・サラリーマンに子を仕立て 和歌山県 桑南
腕力が役に立つ日もある議員 同 同 桑南

逢ひたさに来たとも言えず近所迄 京都市 高岡 薫
夏期手当まだえ破防を妻排し 同 同 高岡 薫

漸くに子が寝てインクの蓋を明け 大阪市 山崎帆加夫
トレーニングの様にアシカの平泳 同 同 山崎帆加夫

きりつめた生活見舞の期を逸し 岡山県 大塚美能留
県庁にて 同 同 大塚美能留

税金で養う人がこうもおり 同 同
インターンが春に終つた主治医です 岡山県 岡村 牛耕

泣いたので得をしたなどふと思ひ 同 同
行水のさらいな処も俺に似て 島根県 星野 侑正

行水でもてあましたる二男二女 同 同
愛人へ頼るポートのゆれ心地 岡山県 國正田吾作

日傘乗すポート視界を遠く逃げ 同 同
まだ生きていたか暑中見舞くれ 貝塚市 津田 千舟

出張をした筈が居るビヤホール 同 同
堅人では校長なんぞ勤まらず 出雲市 多久和一 路

花豌豆妖婦の性に似てからみ 同 同

沿線の向きを委へさす路が出来 堺市 丹波 太路
満員へ席譲られて知つた老 同 同

徒手空拳ですとデツカイ家を建て 愛媛県 島井 川鳥
願うてもないおわりだけど銭足らず 同 同

残業が三日続いて恋となり 鳥取県 日置 文笑
秘書三年居留守の嘘も鮮やかに 同 同

薬局で問い返へされて赤くなり 大和 戸田 嘉一
改札を過ぎあみ棚へあわて出し 大和 同

もう逢わぬ決心貴女は好きだけど 神戸市 山本 利彦
皮肉とさえとれる無口な人の世辞 同 同

食不振乳一本を思案する 貝塚市 野中 稔一
花洞む人のいのちもかくやある 同 同

一徹な兄もこの頃やつしだし 大和 野田 勝豊
眞白い異性の袖が短かすぎ 大和 同

七夕へ僕は墨する役をする 貝塚市 小島さぎす
めざしだけ買うて明るい店を出る 同 同

役得があつて発起をひきうける 大牟田市 新谷 風浪
発起人滅私の様な事を言ひ 同 同

回診は花の香りをほめただけ 貝塚市 多炭 若柳
つもごりへ昔は夜逃の手があつた 同 同

治りかけ利殖の研究でもしようか 貝塚市 新城於久良
落ちてゐるなとハンカチーフ見て通り 同 同

おしやべりのとこまで母に似て育ち 玉野市 渡辺あきら
貸切は海が見へたと云うさねぎ 同 同

母は云うべんやいとをすへてゐる 大阪市 横田 方眠
大掃除母には捨てるものがなし 同 同

妻同志他所の生活を不思議がり 佐賀市 南川 光男
民主主義マイクの妻は勝氣なり 同 同

へこち老の横顔

尼 綠之助

小倉寿一氏——号してへこち、近作柳樽で活躍中。川柳を一寸嗜つたのが四十年位以前とのこと、柳樽寺初期の句風が頭にこびりついているようだ。だから句風が何としても古い。然し古いからと言つて無価値かと言えはそうとばかりも言えない。にじみ出た人間味には圧倒されることが多い。へこち老には年齢がない。強がりはばかりでもなさそうである。氏は七十才が近いから老と敬称するのだが、氏に対しては甚だ失礼な呼称である。氣も若い、身も達者、こたわりのない交際、明け放しの明朗さは、駭蕩たる人柄と共に一瞬にして人を包む。老の口から承ると、昭和廿四年に小生の門をたゝかれたのが川柳の第一歩だそうである。なるが故に私を今でも先生と呼ばれる——くすつたことこの上なし、まあそんなことはどうでもいゝ。入門以来の熱心さは驚くほどで、出雲の句会を忽ちにしてリードされた馬力には涙が出る。若い輩中がどれほど鞭達されたか、その功績は大い。昨年三月志を立て、上阪、今春は一家を引き具して大阪へ移住、老と別れることになつたのは限らない寂しさだ——が老はどこまでも出雲支部の同人として柳道に精進すること、年齢を超えて友情はうれし。大阪に在つても多忙の中から熱心に柳道進進中の由、その熱誠ぶりに応えて過日不朽洞会員に推薦したが「未だ初心の域を脱せず、ウンと強勉してから後のこと、会員以上に力を捧げるつもり云々」との返事、私も長い手紙を読み乍ら老の真情とその底から湧き上がる川柳愛にうたれ

整理をばうまくのがたイエスマン 津山市 菱川 正美
 アルバイトさえも就職難となり 同
 一人子へ父母の意見が又違ひ 岡山県 太田 又州
 人並みに我も親馬鹿たらんとす 同
 パチンコもデモも知らずに病うつり 高槻市 谷脇土佐兄
 酒臭き蚊帳に離婚をフト思ひ 局
 二十年やつと清掃課長なり 岡山市 津田妻太楼
 むしやくしやの安全弁は女房なり 同
 街録が夫人のヒスをもてあまし 貝塚市 永吉 喜好
 新聞の何日かは僕も人事往來 同
 殺したらくらしのたゝぬ牛を飼ひ 岡山県 池田 古心
 元皇族でお菓子の賣れること 同
 高良女史逃げも隠れもせんと言ひ 児島市 難波 鴻峰
 國會もゴム製品のようにのび 同
 知性なきことを口紅で知らせ 高知市 岡本 元馬
 敗北が娘の爪を紅く染め 岡山県 岡野風の子
 駱車ベル心のテールブク々に切れ 熊本市 鹿本 実信
 新任の当分だけは親切な 岡山県 岡本 薫翠
 間借させ家主になつたつもりで居 大阪市 長谷川義英
 こんなにも居たのか予備隊の行進 豊川市 堤 ちる
 療養所やつぱり女にある魅力 鳥取県 武田 粗粒
 俺は悪くないよと保釈者の弁 岡山県 光好三四詩
 夏はよし夜店の客に我れも居る 京都市 鈴木加代子
 魚釣の妙味を知らぬ奴とききた 岡山県 白井三林坊
 明星をみよとやさしい母の指 京都市 石本山茶花
 扇風機不純な恋を見てしまひ 京都市 若山 圭草
 立附の悪さ月賦のせいにする 京都市 倉田 錦川
 泣きに來た女へ飯がこげかゝり 京都市 佐久間折草

初恋の人に負けない子 沢山 愛知県 村上 和子
 まぎらしい角帽で家出の子が帰り 石川県 桑山 とよ
 見舞人俺を煙に巻いて去に 岡山県 難波 陽炎
 秘文録後の祭になつて出る 大阪府 神谷 眉山
 片足に向いた仕事が見つからず 岡山県 田中 敬貢
 檢温が百合の香いをほめて去り 岡山県 沖 一糸
 夕涼み同じ浴衣え振返えり 大阪府 横倉漫多朗
 マネキンが着ればきれいなワンピース 大牟田 野口 草佳
 女教員ゆかた姿のなまめかし 岡山県 森川 東南
 掛金の済まぬミシンを娘に持たせ 和歌山県岸本 木魚
 再婚の氣持になつた頃還り 岡山県 堀 不漁
 投票場僕も長蛇の一人なり 愛媛県 青野天下堂
 手を抜いた工事豪雨が洗ひ出し 神戸市 小倉へどち
 退院のプランに耽る回復期 大阪府 田山 芳洲
 買物のコツも覚えた妻となり 滋賀県 石王 文子
 割烹着新妻として白き 岡崎県 稻吉 佳晶
 轉勤の荷物へ釜が邪魔になり 岡山県 森永 天明
 遍歴の何処の土にもなるつもり 貝塚市 小田 柳叟
 ネオンの灯捨てる命が惜しくなり 岡山県 松村 意坊
 インタヴュー夫婦の仲の良き書き 大阪府 鈴木 風鈴
 水鉄砲相手かまわず差向ける 高知市 松下 蘇水
 もう駅に着くらし店の並びよう 大阪市 飛藝 春風
 病床の映画批評もフアンの顔 貝塚市 谷口 流水
 眞似られてうれしい癖も持ちあせ 岡山県 本田恵二郎
 命日え済まない裸で手を合せ 大阪市 永田六竜子
 ビタミンがビタミンと南瓜ばかり出し 大阪府 山本青道心
 家出だとわかる夜汽車の物思ひ 大阪市 成田壽々女
 エロ本にだけは押さない蔵印書 岡山県 岡田 青果

た。
 ついでに老に余技あり、手相判断、プロ
 としても上の上、然も余技なるが故に最も
 信頼すべきもの——老の健闘を祈りつゝ。
 六・二二

七面山氏の

句を読んで

日置文笑

「川柳雑誌」六月号を見て最初に感じた
 ことは七面山氏の句が今迄のように肉体川
 柳でなく職場の句ばかり載つてゐること
 ある。私が「川柳雑誌」をとりはじめたの
 は、本年の三月号からであるから、これ
 僅か四号目であるが、三、四、五月号に載
 つていた七面山氏の句は、キツスとか乳房
 を扱つたいわゆる肉体川柳が殆んどだつ
 た。七面山氏が今回に限り職場の句のみ扱
 句されたのか、或は選者である路郎先生が
 職場の句を主として扱かれたのかは、私の
 知る処ではないが、昨年三月号（これは本
 年二月に三鴨美笑氏より送つて載いて、私
 がはじめて読んだ柳誌である）の春の窓口
 で、七面山氏の肉体川柳を批判して居られ
 た路郎先生が、選句にあつて肉体川柳を
 特別扱いにされる筈はないと思ふ。又両方
 扱句されたとして、職場の句にのみ秀句が
 あつたとも思われぬから結局私は、七面
 山氏が肉体川柳を作句されなかつたと云う
 結論を出した。
 何も肉体川柳が悪いわけではなく、又私
 のように未だ本當の川柳も作れない青二才
 が云々すべき筋合のものではないが、願わ
 くば七面山氏に、今度のような句もどん
 どん作つて戴きたいものである。



源義經

(一)

富士野鞍馬

牛若になつた息子をうれしがり

(武九)

牛若になつた若衆を聞きにやり

(拾九)

牛若丸といふ少年に好感をもたれ、憧れともなつてい

る。牛若丸は、左馬頭源義朝の第九子で、平治元年己卯年

(一一五九)に常盤を母とし

て生れその年の平治の乱に義朝は清盛に敗れて、長子義平

は戦死、二男朝長は逃げる途中

で自決、三男頼朝は捕えられ、

自分は家來の鎌田政清の舅、

尾張内海の長田忠政の所へ

落ちのび、明けて永暦元年正月、

浴室で謀殺され三十八才を

最後とした。

左馬頭桂馬のところで歩の餌食

(タル三九)

母の常磐は、今若、乙若と牛若の三人の子をつれて大和

龍門の里に隠れていたが、平

家に捕えられ、子供等は清

盛の継母、池の禪尼の情けで

助命され、頼朝は伊豆に、今

若は醍醐寺、乙若は八幡の宮

え預けられ、牛若はまだ二才

だつたので母と共に京都に居

たが、四才で母の手を離れ、

六才の春鞍馬寺東光坊に預け

られ、遮那といつて覺日律師

の殿しい教育を受けた。

常磐の子助ける池の深い恩

(タル二九)

一門の仇は禪尼の慈悲から出

る(拾五)

常磐はその後十年間程清盛

の妾になつていたが、一條大

藏郷長成の妻となつた。

僧正ヶ谷に小さな足駄跡

(タル一五四)

かけたといふ話もこしらえられて

いる。それを古川柳は。鞍馬から夜な

く通ふ五条橋(タル一三四)

五条橋毎夜くとうつたえる(〃)

平家から検使にあきる五条橋(拾五)

平家の検使また今日も五条橋(タル一六〇)

など作り、最も面白いのは千人切の丁度

千人目に五條橋で弁慶に出合つたとい

ふのである。

牛若ははね元結の元祖也(拾五)

稚兒姿の足駄履きの牛若に草鞋履きの武装

した荒法師弁慶が負けるとい

う痛快さは少年でなくても興味

がある。これは謡曲、能、劇、舞踊、物

語に作られて、古川柳もそれを詠んで

いる。牛若の鞘へさわつて飛上り(拾六)

五条橋鞍馬天狗のひんの上さ(タル八〇)

五条橋足駄をわらじもてあまし(〃九三)

牛若は左官さいとり武蔵坊(〃一五一)

早業は牛若御名に似たまわす(〃一四九)

五条橋で弁慶と出会つたの

は承安四年(一一七四)二月

で、牛若十六才、弁慶二十二

才の時といふことになつて

いて、牛若はその日はじて鞍馬

から下りて、一條長成夫人の

母常磐に会つて帰りの道で、

弁慶は教盛を待つて立つて

いたのと会遇したといふのであ

るが、それがおもしろく作ら

れて傳つてゐるのも愉快であ

る。七条を脱いで五条に名を残し(タル六四)

弁慶は五条の橋で主が出来(〃一三〇)

弁慶はその時牛若の家來に

なることを約束したといふの

である。その年(承安四年)の三月、

俗に金賣吉次といわれている、秀衡の臣金沢吉次

信高が、鞍馬寺の同意を得て、陸奥の鎮守府將軍藤原秀

衡の下へつれていつた。これにまた奥州下りとして

いる物語がある。目はし利く吉次が供の丸額(ケイ初)

丸額は元服前の額(拾五)

鞍馬をばかけ落頭が音がわり(〃九三)

十六才(〃一四九)

遮那王の尻金箱ですりこわし(〃九三)

金売の荷物(〃九三)

あなたは丑のお歳かと吉次聞き

残暑御伺

南區醫師会文化部

杏林川柳会

田中鳥耕

河村瑞川

南捨舟

黒木弾正

木村無名林

長谷川迷路

牟田一哲

海野比呂史

平尾太希志

安岡珊枝郎

中島生々庵

川京都支部

京都市左京区浄土寺
真如町四番地村松方

牛若というから (タル二六)

この道中美濃の青墓で、強賊熊坂長範に遇いその一味を討つたことは有名である。

半分はあげてもよいと吉次いひ

(タル六)

牛若が居ぬと熊坂大仕事

(〃)

熊坂をせめたら手下まだ出よ

う (〃)

天狗助太刀に熊坂気がつかず

(タル九)

牛連れで吉次危難をまぬがれる

(〃四三)

長範は吉次来つて凶事となり

(〃五三)

こゝでも牛若の離れ業が詠曲「熊坂」などに作られ「十六七の小男の目の内に勝れたる」があるので。

熊坂は十六七にしまられる

(タル三八)

吉次の一行は相当の人数で應戦したのであつたが、牛若一人で片づけたようになってゐるのも面白い。五條の千人切の傳説と併せてこの青墓で十四人切つたことを詠んで

牛若は大長刀に二度出会ひ

(タル二九)

御會子十四人目に熊を切り

(〃三五)

牛若は千十四人斬りたまふ

(〃五)

青墓を入れると千十三人

(傍三)

五條で千人、青墓で十四人

ということになつてゐるが、

弁慶は切らなかつたから千十

三人ということになる。

それから尾張熟田の大官司

藤原祐範(頼朝の叔父)が加冠

の式を行い元服して、九郎義

経となつて奥州へ下つた。一

説には近江の鏡の里で自分勝

手に元服したともいわれてい

る。又義経記には父左馬頭の

名をとつて「左馬九郎義経」

となつたと書いてある。

だん／＼東して、三河の矢

矧橋のはどりの長者の家に泊

つたときに、その娘浄るり

姫と恋をしたように「十二段

草紙」(浄るり物語ともいう)

に作られ、姫の琴に義経が笛

を合わすというところは絵に

もなつてゐる。

用もない縁を組んだと源九郎

(タル六)

浄るりに笛を合わせるきつ事

(〃三一)

源平の若衆名のある笛を吹き

(〃四三)

この時の義経の吹いたのは

「蟬折」という名笛で。平敦盛の「青葉の笛」を詠んで

いる。この「十二段草紙」は

足利義政時代の作といわれ、

作者はわからないが、「嬉遊

笑覽」には織田信長の侍女、

小野お通の作と書いてある。

それで。

蘭丸はお通が尻をつめるなり

(タル十一)

という古句もある。そして

これが「浄るり」の始りと傳

えられてゐる。奥州平泉の藤

原秀衡の下へ行つた義経は、

治承四年(一一八〇)兄頼朝

の石橋山旗上げ後に参加した

であろうが、その年の十月、

富士川で頼朝、維盛の対陣には加つて居ない。嘉永三年(一一八四)の木曾義仲追討

から、華々しい活動になつて

いる。古川柳もその間の義経

を詠んだ句は見当らない。

川柳雜誌社
大聖寺支部
石川県大聖寺町
法ヶ坊一四栗山方

岡山縣邑久町福中
岡村昌夫
牛耕

名古屋千種区観月町一
吉田水車

長野県須坂町六六七
高峰柳兒

津山市田町九一
小島祝平

大阪市東住吉区西今川町五の三〇
福本 骨

函館市青柳町
函館川柳社

津山市美濃町一六
津山川柳社

番傘
番傘川柳社

南区北桃谷町七一
電話南〇八四七三番
振替口座大阪二六九一九

川柳を研究したい人にも好適の書



川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新

指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはなんもの

か」から説き起して収むるところ三十七講、平明で親切で、初心

者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを會得する

ことが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書で

ある。敢て一読を薦む。

B 6 版 (二二二頁) 定價一〇〇円 送費 十六円

取次御注文は

大阪市住吉区南内市代西五丁目二五
電話日版大阪七五〇五〇

川柳雜誌社

まあひと泣くのは女の術だなんて
泣き止まらぬ子スキヤラルが一つ減り
泣き濡れた娘へ女警の腫がさし
泣かされて来るよりえと手に云え
母誘う映画は泣かず物ばかり
泣きみそへ母が泣きたううう
泣いたまゝ父の意見へ娘が逃げる
泣くだけの女の智慧に負けても
一人子の泣いた写真も撮つておき
文楽で母人形に泣かされる
子供泣いてる妻に肩を持ち
泣かされたひとが恋する日あり
もう泣かぬ心算くっの客に泣き
泣かされた過去を母親くり返し
泣かれた役者を廊下の椅子では
席題「怒」 黒川 紫香選 生々庵
雷をおとして親爺釣に出た 梅里
怒つて母の顔か光るもの 紫郎
見すかされまいと怒つた顔まじし 生々庵
主任より課長より部長よく怒り 牛歩
怒りすぎた親父小遣やると云う 花村
叱られてあの子淋しい生れつき 博也
怒られる途端雷鳴つてくれ 好郎
怒つてはりまつてせしやが来る 恒明
古女房となり怒つても利かず 豆秋
怒つてる声へ交換嬢冷静 幽王
一寸した怒り恥かし子の寝息 天貧
怒つたら亡父に似てる子の腫 古貧
怒りなんなんと端に座り込み 鮎美
女房を怒鳴り弁当忘れて出 喜久堂
怒らないあいつは矢張り三枚目 扇子仙
怒らして彼女へ又も金を要り 正司
証明書出すに怒つた顔をして 白柳子
席題「笑」 潜水白柳子選 天
笑顔よし否か応かを計りかね 天
笑はれているとも知らぬ視世流 摩太郎
笑うからいやだと座る舞扇 嘉一

ぶく漬のおかわりをしてよく笑い
笑ひをこらえてまぢなれを受け
欲張つた願ひ我さん笑うだけ
添いごとく笑ふ事なき日がつき
督促状大きな声で笑つとく
だし抜けて笑へは皆んなの眼がま
その笑ひ一層激しいものに触れ
アベックの下車する間際まで笑い
笑はせて甲門客は親身なり
末座から笑われ役を買うて出る
笑ひ声が羨やまし裏の子沢山
苦笑ひ言ひたいことを言はせ
用件の半分笑う娘の電話
笑われてゐるさうに街の灯をさける

川雑布 魏支部 ウイロー社句會 (ハワイ)
四月 古川麗花麗報 馬喜々
張り切つて小さな夢へ共稼ぎ 柳葉
嫁き後れ論め切れぬ夢を抱き 亭駒
妻からの手紙夢まで書き加え 快夢起
楽隠居してもホーハナ夢になり 註・ホーハナ、砂糖耕地の、労働畑仕事
莫と俺夢で生きてる人生さ 雅一
還る夢二度まで其の後死の便り 紀南児
故郷の夢に桜は咲き揃ひ 泉水
七色の夢よ故郷の山よ川 晩翠
まだ夢を見ているのかとやかされ 紅宿
朝の贈年甲斐もない夢にこれ 迷子
妻の夢だんだん小さくもつて行き 純香
富士のある祖国へ夢わまだ続き 芳雨
夢で会ふ彼は今でも独り者 友江女

雑川 岡山支部句會 (岡山市)
六月十五日 於山陽旅館 藤本 満年報
麦刈へ養子は辛い賜暇を取り 吉備平
あの頃を忘れて妻に不足か出 忠美

御機嫌は斜と秘書は眼で知らせ
待人へも座布団の位置を決め
公休を又ストかいとたつねられ
益暮れの行事にまつた値上げスト
夢ばかり追うて妻に養なわれ
学園の夢警棒がかき廻し
交番の椅子でスターの夢がさめ
弱虫は夢の中でもいじめられ
待人へ夕立雲が動き出し
独立の日にも帰らぬ夫を待ち
入港のしらせ朝から風呂も立て
待人のネクタイすきな色でくる

雑川 弓削支部句會 (岡山市)
六月七日 於黒田 福島 笑泉居 鉄児報
命がけの仕事薄謝ですまされる 桃々
奥様が出て来て薄謝受取られ 弓削平
商売あつて薄謝へけりを付け 古心
手当より薄謝が多い椅子の徳 汀漁
薄謝を知らずサーピスゆき居 笑泉
役徳の薄謝左遷の種をまき 不老
臨けて見てほんまに薄謝だと思ひ 鉄児
蛙眼をさまして春だと思ひ 久米女
こゝからは田舎ですよと蛙なく 鉄児
鉄先をのがれて虫恋をする 一貫
斗病の散歩虫にあしらはれ 凡児
仰山に蛙恐がるハイヒール 七面山
未帰還の君を想うて星を見る 多々栄
君恋しななとせ後家の様に待ち 不老

雑川 下関支部句會 (下関市)
七月十三日 於下関駅 石川 侃流報
戻り道足元照らす螢籠 九呂平
螢狩の二人は闇を満喫し 侃流
朝露にもう光らない螢籠 妻楊子

螢呼ぶ声から遠くなる二人 藤市
冷たい雨まで追加のビールが来 藤人
久闊の客のビールで妻も酔ひ 妻楊子
こわさないようにビールのふれる音 かうたる
ビール呑む手付違つた出世振り 柳坊
酒ビール焼酎客の顔で決め ほんみ
DIT撒いて間借りの大掃除 半休門
大掃除待つて調度の模様変え 司楼
叱られた印鑑の出た大掃除 ほんみ
甘党は甘党同志で席につき 柳慶

雑川 小郡支部句會 (山口県)
六月二十二日 於松田多恵子居 長野 井蛙報
螢籠一番星が待ち切れず 多恵子
追いつめ螢は逃げて下駄が濡れ 赤飯
ハンストは羅漢仏ほど壁により たくし
先生のストを子供は嬉しがり 土手坊
日備の目にストライキ派手する 多恵子
ゼネストの斗士に家も倉もあり いさを
一大事妻が机で書く手紙 土手坊
御用聞き鏡の中から断られ 井蛙
主婦として朝の鏡は立つたまま 古山
送る子がバックミラーに小さく 眺天

東京そばと 灘一とすじ
アペノ橋地下映画食道街
梅里の店 大萬
★大万川柳(第十九回)を募る
兼題「風呂」 路郎先生選
締切・九月十五日 毎週五枚以内
発表・九月廿一日 (店内に掲ぎ)
御投稿は大万宛・みなたでも

雑川 貴生川支部句會 (滋賀県)

六月二十八日 於役場階上 黄瀬 美秋報

恋人に涙見せたくない映画文子
泣顔を見せまいとする薄化粧善子
留守番の気安さ裸のまゝで待ち木人
道問へば暖簾に裸首を出し劣焦
海浜に裸を呼んだのだと自慢四苦峯
国敗れ裸で踊る職で生き紅月
物干の植木裸で水をやり春菓
新聞で見たデパートの値で値切り同
軽気球百貨店はこゝにあり迷羊
大丸で落合ふことにして二人美秋
大丸で買うて十合の値も見ととき春菓
ワンピース討論会で負けてる子夢生
夏やせを世帯やれと子等知らず文子
夏やせを待つて見合の写真とり美秋
夏やせを氣にした父の七回忌昇棋
此暑も母も着だしたワンピース文子
雨宿りさてよいとこに百貨店斗志
夏やせを隠し切れない金詰り観月
あれ程の涙の過去をもう忘れ夢生

雑川 京都支部句會 (京都市)

村松 夢裡報

桜ん坊こんな真球を夢に見る迷々
ブラウスは白みつ豆のさくらんぼ晴芽
さくらんぼカトグラスの幸を知るいくを
ころげまゝ桜ん坊に長い尾をつりて紫蘭
桜ん坊シャンソンは又巴里祭司郎
さくらんぼ妖しきまでの指の先蘇海
踊る歌あればと箱の桜ん坊紫蘭
さざ波にヨット相寄り相離れ鳥雀
さざ波に足洗はせたままである薫
雨後晴さざなみにある水すましゆきら
苦笑する兄へ此処ぞと追求し昭子

好敵手と云われ名人苦笑ひ好浪
苦笑するその眼の怒り見逃さず夢裡
課長の子いたつらさで笑つて見羊
閑定所で出逢うた友と笑ひ合ふ豊次
安志所これ見よがしに披衣紋和明
襟足をこれ見よがしに披衣紋みゆき
襟足を人に見せないパーマの娘子猿
襟足をほめて美容師髪を切りみてい
謳はれた名残りもわづか襟足に薫
襟足の白さ内緒の株の欄みてい

雑川 大聖寺支部句會 (石川県)

七月十二日 於井上笑平居 野村 味平報

待つ間標語覚えた控室光郎
九尺長屋でママと呼んで居る光郎
子の漫画父のズボンの穴も書き桃園
アベツクの帯だけ違う貸浴衣光郎
双方をほめてまどめる仲直り笑平
浜の朝窓に浴衣の肩を入れ酔平
まあよかつた仲直りして気軽なり味平
再婚へ小皺をかかす牡丹刷毛かつ子
剣道に昔忘れぬ汗をかき明石

雑川 浜寺病院支部句會 (大阪府)

膳所 新三報

繙帯をした子お菓子握つて居新三
映画館涙の顔え灯かともり青道心
ユニホーム涙は腕で拭きとられ丸盆
繙帯の子供を連れて謝らせ大根
欠勤の理由繙帯派手にして一色
殊勲賞繙帯写される冬水
救護班繙帯巻もちと習ひ秀翠
列車事故語つて繙帯記事にのり漫多朗

體温川柳句會 (大阪府)

七月二十日 於千石莊集會室 河楊 梵鐘報

原稿の売れる日信ず妻いとし稔一
原稿へペン字の上手さたけ云はれ安光
この辺でキツスをさしたる原稿紙哲水

原稿の自分の文字を読みあぐね両成
速達で原稿を出し温泉に浸り鮎美
原稿の誤字に速達追ひかけるはじめ
女中にはピンと来て二人の死甲馬
女中も居れど困はれて居る私小坊
女中も居れど困はれて居る私小坊
押売へ挑む女中の口達者春舟
売出しの作家女中もしたじゆさぎす
療友の眼鏡はづした別な顔喜久
父ちゃんの子守ハダシで走らる愛論
遅刻して走つた汗を拭いている没食子
終電のベル走らせる走らせる春柳
道草の少女ヘネオン灯きはじめ正司
道草をして案の上おごらされ恒明
水中花病んでいる眼をたのしむ千舟
ふもとから肩で運んだ水の味月舟
新妻よビールよ都会の水に冷え初篇
水差しの水を無情に思ふ朝秋空
ぶらつと来た水の水のきれいな川だつたら骨
枕元に水だけ妓も居らず梵鐘
水すまし右も左もないわいな玉露
水中花女の生に似て悲し葉子
学歴を惜まれ女中として再起安光
ひそかなる女中の思慕の御曹子はじめ
ハンカチで女の鼻緒たてゝやり武夫
いま尻に敷いたハンカチ口に当て喜好
汗かきの愚痴ハンカチを又失くし藍子
形だけハンカチ振つて別れて来伸史
ハンカチの汚れ上野に着いた顔佐吉
ハンカチを振つて南へ征つてきり豆秋
ヨクリ一匙生きる努力へ水菜生々庵

日の丸句會 (鳥取市)

六月十六日於 日丸車体療 河村 日満子報

転落は蝶の舞ふさへ淋しかりなきさ
パチンコの煙草気安ら引抜かれ吾柳
チンジャラ／＼腹の立つ程隣は出芳道
もう一寸待てばよかつた濡鼠三歩

テスト場へ傘を忘れた雨上り芳道
雨上り濡れた體に似た町よ日満子
暴君に似てるよパチの雨後の道粗粒
御見舞へ肝心の入床に居る日満子
退院の噂見舞をせかされる同
パチンコで食ふ吐ならん通ひっつ同
パチンコ屋ヂヤラ／＼／＼俺を呼び新雪
不思議な客もパチンコ屋も儲け日満子
パチンコの球の行方に必死の眼遊粒
パチンコで金百円のたばこ喫ひ祖星
看板の雪解けしつ／＼首に落ち朱雀

交助会川柳句會 (大阪府)

於交助会事務室

割勘に千円札が並べられ緑雨
紙芝居昔弁士の声を張り博也
頭数読んでから演る紙芝居巖
約束を破つた数もあいこなり昌子
番傘を持つて恥かし雨上り同
玉野健全 川柳會 (玉野市)
娛樂協会 六月二十日 於備南高校 中村ただみ報

急用の受話器取次ぐのもあわて美婦適
急用の木戸口借金取りが侍ち忠美
急用へ守衛くわしいことをき、夏美
夏期手当ビールの分は別にのけ百文
ビールなら飲めと彼女つて来るたどみ
失恋の味ほろ苦しビヤホール梅林
二次会のビールの泡は高くつき東
母さんの溜息知らぬ子の願ひ

阪田謄写版

大阪北區芝田町二五

阪田商會 株式會社

電話五六三 福鳥九五一番

柳界展望

▼本社八月句会は二日午後六時から下寺町二丁目の光明寺で開催盛
 会▼大阪通信病院川柳句会は八月
 十六日午後二時から五階講堂で没
 食子氏送別会として開催▼南区医
 師会文化部杏林川柳句会は八月十
 七日午前十一時半難波波苑和歌山県
 妙寺町へ吟行南捨舟居で開催▼南
 海電鉄川柳句会は八月十八日午後五
 時半から粉浜の親和寮で開催▼川
 雑大阪南支部句会は八月廿二日午
 後六時からアベノの橋近畿地下食
 通街直営食堂で開催▼川雑大阪北
 支部の第四回納涼川柳大会は八月
 廿四日午前八時半難波歌集合、和
 歌山県伊都郡九度町慈尊院勝利寺
 で開催以れも路郎主幹出席▼玉野
 市主催第二回淡川海水浴場川柳大
 会が八月十七日午前十時から玉野
 市淡川海岸で開催川雑岡山支部八
 月例会本大会に合流▼川雑岡山支
 部七月例会は廿日に山陽旅館で開
 催▼交通局川柳句会は九月十四日
 (第二日曜)午後一時から秋季川
 柳大会を東福町の交通局病院五階
 サンプルームで路郎先生を迎えて開
 催、兼題「秋」路郎選「親切」春
 菓選「提灯」緑雨選、来会歓迎
 ▼吉沢淳樹郎氏追悼会が八月十九
 日午後四時から東京都渋谷区下通
 二の田中養鶏園で開催された▼新
 潟県下川柳大会が九月十四日午前
 九時から新津市内新津館で開催さ

れる▼長崎川柳社八月第一例会九
 日、酒屋町アパート重野三階居、
 第二例会廿三日、鍛冶屋町吉川双
 六居で開催▼青森県川柳社八月例
 会は十日夜七時半蝶五郎居で開催
 ▼麦川柳社(徳島市)八月例会
 十七日午後一時南仲町一西尾居で開
 催▼ぶどう園句会(津山市)が八
 月廿四日午後一時から小田中笠松
 の善紅居で開催▼句集「城下街」
 が六月一日に津山市美濃町の津山
 川柳社から刊行された非売品▼
 食満南北氏(堺市)は八月十一日
 午後六時から関西芸能倶楽部で明
 治大正期の俳優うら話をされた
 ▼大島清明氏は熊本市北水前寺町
 一五三に移転された▼長宗白鬼氏
 は大阪市城東区放出町西一丁目一
 八四に転居▼小倉へとも氏は神戸
 市東灘区本山町中二九一番地へ
 転居

▼浅田一医博
 は(東京医科
 大学教授・川
 柳不朽洞会賛
 助)多年病臥
 されていたが胃潰瘍出血のため七
 月十六日に東京都世田谷区代田町
 一丁目六三五番地の自宅で逝去さ
 れた。行年六十五歳。謹んで悼
 む。なお告別式は東京医科大学法
 医学教室葬で十九日午後一時二
 時に自宅で執行された。▼市場没
 食子氏(大阪市)は七月十六日附
 で新設の淀通信病院院長に榮転
 された。なお大阪通信病院川柳会
 では七月十九日に五階講堂で没食

不朽洞

子送別川柳会が開催された▼大森風
 来子氏は岡山市内田町三三五岡
 大医学部官舎へ移居、なお同氏は
 八月十日には満年氏と共に勝田郡
 豊国村の川柳大会へ、十七日は久
 米雄、満年の両氏と共に玉野市主
 催淡川海水浴場での第二回納涼川
 柳大会へ出席されると▼延永忠美
 氏(岡山市)は社用で来阪、八月
 七日に寸暇を得て不朽洞を訪問、
 久し振りに路郎師と歓談され同夜
 二十二時に帰岡された由▼福島鉄
 児氏(岡山市)からの暑中見舞のは
 がきに「おれに似よ」の句碑の前
 に团扇を持った女二人を配し、上
 部に花火が打ちあげられた画があ
 る。そして下部に川柳の町と云う
 文字があるこれが弓削郵便局から
 売出された暑中見舞のハガキだそ
 うな▼福田山雨楼氏(横浜市)は
 ヒドラジッドを七月中旬から服用
 され最近その効果があらわれ咳が
 減つて来たところ、こんでいられ
 る。一日も早く快癒を祈る▼坂田
 良坊博士(下関市)のその後は経過
 良好らしいが又しても知人から禁
 酒を破られそうになるので、そう
 いう人達に示す句を路郎師に求め
 て来られた。路郎師は早速「今は早
 や命縮める酒となり」の一句をも
 のし、これを壁に色紙に揮毫悪友
 退散のお守として送られた▼戸田
 古方氏(池田市)は九月廿二日(月)
 以降十一月二十九日まで週一回大
 阪市主催の成人学校で川柳初歩講
 座を担当されることとなつた場所

編輯局★に☆て

等詳細は未定▼福田丁路氏(高槻
 市)は八月一日阿蘇から「パチンコ
 で登山のバスに遅れかけ」の句を
 寄せられた。熊本、島原、雲仙長崎
 を廻り、福岡での会議に列し帰阪
 されると▼藤本満年氏(岡山市)は
 八月三日、岡山県の北海道と云わ
 れる大原町へ行かれた、いよいよ
 同地に川柳会が本田恵二郎氏等
 により発足したとのこと▼正本水
 客氏(大阪市)の勤務先大阪鉄道
 管理局の職名が部課制に戻り運転
 部総務課になつた▼間島青丹氏
 (京都府)の勤務先天王寺鉄道管
 理局の職名は営業部総務課と改称さ
 れた▼木村千代男氏(倉敷市)は
 千容と改号された。

★残暑の厳しさにもめげず編輯に
 没頭した。従つて本号は前号より
 も一段と内容が充実したので御愛
 読がいただけのもとの確信する★
 と同時に原稿がフクソウしたので
 雑筆春秋其他載せきれない原稿の
 多かつた事を寄稿家諸氏に深謝す
 る。★編輯に対する熱意は今後も
 お約束出来るが、何んと云つても、
 ★よい句とよい原稿が雑誌のいの
 ちであることを思うと一層の精進
 させたい光輝ある柳誌にしていただ
 きた。

★各地の柳界も動きが目立つて来
 た。句の秋と共に私の川柳の旅が
 忙しくなること、思う。

募 集

課題吟募集

- 急病(十句) 北川春巢選
 - 嵐(十句) 國弘半休門選
 - 後姿(十句) 市場没食子選
 - 三等重役(十句) 藤本満年選
- (九月廿日締切)

毎号募集

近作柳檉(雑詠廿句) 麻生路郎選
 川柳塔(雑詠) 麻生路郎選
 文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

- ▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事、
- ▼「近作柳檉」は一般作家の雑吟を募る。
- ▼「課題吟」は何人でも投句が出る。
- ▼「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌

第九号
 定価 四〇円
 送料(四円)
 半ヶ年概算 二六四円
 一ヶ年概算 五二八円
 昭和廿七年八月廿五日印刷
 昭和廿七年九月一日発行
 大阪市住吉区南内方西五丁目二五番地
 行徳印刷 麻生 幸 二 郎
 大阪市住吉区南内方西五丁目二五番地
 発行所 川柳雑誌社
 郵務口番 大阪七五〇五〇

Printed in Japan

THE SENRYU ZASSHI

NO. 304

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

避妊には..
ゼリー剤を!



- ★落ける時間がいらず速効且つ確実に連用しても無害
- ★注入器で深部へん送るから、タンポンに塗り御使用を!

サンシーゼリー

山之内 1瓶 2 太郎 3 サンシー

とつと速く とつと便利に!
とこの期待に應えて

名古屋ー大阪急 2時間55分

名古屋発 6:00 11:00 14:00 17:00
大阪上六発 7:00 12:00 15:00 18:00

普通急行はこのほか60分ごと運轉

近畿日本鉄道

アイスクリームは
堅牢で衛生的な
この容器で



酒服用紙コップ 食堂用紙製品一切

特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 2912 2913

たっぶり
愛嬌たっぶり
B1 たっぶり



疲勞と脚氣に

強力メタボリン

錠・注・無痛注